

新しい教育観のよとの日本語教育

當作靖彦

カリフォルニア大学サンディエゴ校

「教育とは今を教えることである」と言ったのは教育学者の John Dewey ですが、教育内容とはその時代を反映するとともに、その時代の社会に直結したものでなければならないものです。それにより、教室の外に出て、有意義な生活ができる人間が作られていくわけです。

21 世紀になりすでに 10 年以上が経過しましたが、21 世紀の社会が 20 世紀の社会とは大きく違う社会であることは火を見るより明らかです。テクノロジーが急激な発展をし続け、それにより私たちの生活全般を変えてきています。私たちが生産的な生活をするためには、生活の方法も変えていかなければならない時代となりました。21 世紀を効果的に生き抜くためには、20 世紀とは異なる能力を身につけることがますます重要になってきました。この変化を反映して、現在世界の教育界では、学習者が身につけるべき能力に対する見方が大きく変化してきています。

日本語教育を取って見るならば、以前は、日本語のクラスでは、日本語の内容、具体的には、文法・語彙を知ることが日本語の能力と見られていました。それが、その知識を使って、日本語を使えるようになる機能的能力を身につけることが日本語能力と見られるように変わりました。最近では、この日本語自体の機能的能力よりも、21 世紀に生き延びるための能力を身につけることが学習を通して獲得するべき能力と見られるようになってきました。すなわち、日本語のクラスでも、日本語の学習を通して、この 21 世紀を生き延びるための能力を身につけることが目標となってきたわけです。

21 世紀を生き延びるための能力とは、具体的に、創造力、高度の思考能力、問題解決能力、協働力、テクノロジーのリテラシーのようなものを言います。これらの能力を日本語の授業を通して学習者に身につけさせようというわけです。日本語の学習が 21 世紀の社会と直接結びつくことになるわけです。

このような能力観のもとでは、日本語教育の内容、方法も当然のことながら変わらざるを得ません。日本語教育を媒介として、21 世紀の社会を効果的に生きていく学生を作る必要があります。

この講義では、どのように高度の思考能力を身につけるかを中学校の食生活をテーマとした日本語のクラスの読解活動の例を通して概観してみます。これまでのクラス内の読解活動は読解能力を身につけるものというよりも、読解能力をテストする活動であったと思います。単なる文法表現・語彙を解読するような活動ではなく、テキストの内容を分析、解釈し、その理解を現実社会、他の教科の既習知識、自分の経験などと結びつけることにより、読解能力が高まるだけでなく、高度の思考能力を伸ばすことができます。

インターネット、テクノロジーの急速な発展により、必要な情報を検索し、アクセスすることが可能になりました。教師がいなくても、学習者が自分自身で自発的、自立的に情報を探し、情報の意味を理解し、情報の価値を判断することにより、言語能力のみならず、文化能力を発展させることができる時代になりました。自立的な学習能力、異文化コミュニケーション能力を例

として、この講義では、反転学習を使った文化のキュレーション活動を見てみます。これも 21 世紀を生きるために必要な情報のリテラシー、自律性などの能力を日本語教育を通して発展させるクラス活動の例です。

言語の目的の一つは、それを使い自己表現し、自己発信することです。それにより、他人とつながり、コミュニティーを作ったり、コミュニティーを変えていきます。ソーシャルネットワークサービスが多用されるのも、この目的を果たすためで、他人とつながることができることも 21 世紀を生きるために重要な能力です。この講義では、ソーシャルネットワークサービスを日本語のクラスでどのように使い、自己表現能力、自己発信能力、他人とつながる能力を発展させていくかの例も考えます。

社会が変わる中、それに対応して教育も変わっていく必要があります。日本語教育もイノベーションが必要な時代となりました。私たちも時代の変化をよく見極め、私たちの教え方、教える内容を新しく創出していく時代となりました。